

日本語教科書と 国語教科書との語彙比較

町 博光（日本語教育学）
内山 和也（日本語教育学）
徐 洪（日本語教育学）

0 . はじめに

日本語教育と国語教育とでは、教育目標・指導内容の異なることが知られている。両者の教育目標と指導内容との相違は、それぞれの教科書にも反映されているであろう。本研究は、日本語教科書と国語教科書の語彙の量的比較をもとに、両者の相違点とそれぞれの基本的特徴とを明らかにしようとするものである。あわせて両教科書の語彙表を電子資料として提示する。

また、本研究では、韓国語国語教科書についても簡単な調査を行なった。但、教科書の全数調査は行わず、特定の語彙項目の傾向を調べるにとどめた。これは、日韓共通の語彙調査の単位が知られていないためである。言語間の比較を可能にする調査法の開発は、語彙論の理論的課題であるといえる。

1 . 先行研究

教科書は、教科書編集や基本語彙・基礎語彙選定の基礎資料として、また教育現場に生かす目的もあって、語彙調査の主要な対象とされてきた[1][2]。本研究と関わる国語教科書の語彙調査として、しばしば引用されるものに文献3・4がある。前者は定期的に改訂されており、文献5が最新である。後者は文献6のCD-ROMに収められている。

日本語教科書と国語教科書の語彙を比較した研究は少ないが、次のようなものがある。文献7は、児童に対し「国語教科書を日本語指導に代用する際の留意点を考え」るため、両教科書の名詞語彙の傾向を探ったものである。文献8は、「児童・生徒の国語学習を補助する日本語教育教材作成の基礎資料」として、国語教科書と日本語教科書に現れるテ形を調査したものである。これらの研究は、教科書の語彙を部分的に比較したものと見える。

また、異言語の国語教科書を比較した先行研究に文献9があるが、これは日中両教科書の単元構成の比較考察を通じて「両国の国語教育に対する考え方とあり方の基本」の究明を目指したものである。文献10は未見である。

2 . 調査対象および調査方法

本研究は、まず、成人向け日本語初級教科書を日本語教育の教育内容を最も原型的に反映した資料と想定し、調査対象と意図した。次いで、比較の対象となる国語教科書は、先行研究の検討から、ほぼ同等の語彙量を有すると見做される小学校1年生国語教科書とした。この比較項目は、聞き取りによる複数の日本語教育経験者の経験的判断からも支持された。具体的な調査対象としては、教科書の使用状況を勘案し、『みんなのにほんご初級』（スリーエーネットワーク）と『こくご1上・下』（光村図書）を選んだ。

2 . 1 . 資料の作成

資料の作成は以下の手順で行ない、各号に対応した4種類の電子化資料を得た。各作業は複数名からなるグループが分担して行ない、それぞれ複数回のクロスチェックを行なった。判断が分かれた場合には、全体で討議して決した。

1. 教科書の本文を電子化する（プレーンテキスト）
2. 電子化されたテキストを単位に分析する（単位分割テキスト）
3. それぞれの単位に種々の情報を付加する（タグ付テキスト）
4. 見出し語認定を行なう（語彙表）

2.1.1. プレーンテキスト

最初に、教科書の本文をコンピュータに全文入力した。ここで、本文とは、表紙・目次・扉・ノンブル・欄外の注・練習問題と新出語リストの類および振り仮名・ルビを除く全言語情報をいう。本文は全文をベタ書きで入力した。

2.1.2. 単位分割テキスト

語彙調査では、調査目的に応じた単位設定が求められ、一般に、短い単位認定は資料の一般性を明らかにする場合に、長い単位認定は資料の特殊性を明らかにする場合に有効であるとされる[11]。ここでは、W単位[12]を基本に単位認定を行なった。また、W単位の基礎となる文節の認定は長い単位[13]に準ずる。本研究の目的は、日本語・国語両教科書の相違点とともに、両者の基本的特徴を明らかにするものであるため、単語相当の単位を選択したものである。尚、単位の分割は単位間に分割記号を挿入することで示した（本研究では2バイトのスラッシュを用いた。以下同じ）。以下に、分析の具体例を示しておく。

／あげはちょう／は／、／ながく／のばした／くち／で／、／みつ／を／すいます／。／
おおきな／あおい／め／が／ひかって／います／。／だれ／だ／か／わかる／かな／。／

単位認定において、特に注意を要する点は以下の通りである。

- ・ な形容詞の語幹と「だ」（変化形を含む）との間は原則として切らない
- ・ 挨拶などの慣用表現は全体を1単位とする。例：／こんにちは／
- ・ 談話体[14]による融合形は1単位とする。例：／しつてる／　／食べちゃう／
- ・ 文末詞[15]と見做される終助詞は1単位とする。例：／いきました／とさ／。／
- ・ 助辞およびコソアドを含む形式について、結合が固定的と見られる形態は1単位とする。ここでは文献12に倣い辞典の見出し語を基準とした。例：／天の川／　／その うえ／
- ・ 括弧などによる注記は間を切る。例：／学生／じゃ／（／で／は／）／
- ・ 外国語はひとまとまりを1単位とする。但、本研究では句より大きな単位はなかった。
- ・ 記号は個々の間を切るが、二倍記号は1単位とする。例：／。／」／　／.....／。／

2.1.3. タグ付テキスト

分割された各単位には、平仮名表記形（漢字は文脈によって読み分ける。但、数字・記号の類は除く）・出現した教科書の別及び出現した課・品詞分類の情報を付加した（タグ付きテキストはW単位一覧表としてTSVファイルで別添する）。

単位の品詞分類には、以下の類を立てた（下線部は資料に用いた略号を示す）。

普通名詞・固有名詞・動詞・い形容詞・な形容詞・副詞・接続詞・感動詞・指示詞・助辞・文末詞・連語表現・記号及び符号

品詞分類について注意を要する点を以下に挙げておく。

- ・固有名詞を含む単位は、意味の上で中心となる部分を基準とする。例：サントスさん [固有名詞] ヨーロッパ旅行 [名詞]
- ・日本語初級の指導項目にない「連体詞」の類は立てない。「この」「その」の類は指示詞に分類し、「大きな」などはな形容詞とする
- ・コソアド系の語はすべて指示詞とする（代名詞、副詞、連体詞などに分けない）
- ・「わたし」「あなた」などは名詞とする（これは前号と関連する措置である）
- ・数や数を含む表現は名詞とする。但、単独の算用数字は記号とする
- ・外国語と外来語とは特に区別せず、特別な類も立てない。尚、両者を識別する場合には文献16が参考になる。例：Goodbye [感動詞]
- ・全体を1単位（複合単位）と認定した挨拶などの慣用表現は連語とする
- ・括弧による発音の注記など、分類不能なものは記号とする

2. 1. 4. 語彙表

見出し語認定を行ない、付属語を含むすべての単位を掲載した語彙表を作成する（語彙表はTSVファイルで別添する）。語彙表の見出し語は音引き仮名遣いの平仮名表記（記号および算用数字はそのままとする）とし、アイウエオ順および頻度順の2種類とした。作業は文献11・13・17・18などを参考にしたが、特に注意を要する点を以下に挙げておく。

- ・語形変化を含む単位は辞書形を代表形とするが、な形容詞は「～な」形を代表形とする
- ・「に」の接尾した形で副詞形をなすもののうち、「に」を含む形で1単位となる副詞は独立させ、語幹と同形の単位と統一しない。例：いっしょに・いっしょ
- ・補助動詞・可能動詞・形式語の類は独立させない
- ・漢語サ変動詞・な形容詞は独立した単位と認め、語幹と同形の単位とは統一しない
- ・発音上の変異形は、より形式的なものに統一する。例：あたたかい（あったかい）
- ・談話体による融合形は口語体に復元せず、別見出しとする。例：食べる・食べちゃう
- ・畳語形は全体を独立した単位と認める。例：むかしむかし・むかし

3. 日本語・国語教科書の語彙（総論）

日本語・国語両教科書の語彙量は表1の通りである（括弧内は自立語のみの数値）。タイプ・トークン比および繰り返し率から見て、日本語教科書は同じ語を反復して提示する傾向が強い。これは、日本語教科書が句型練習に主眼を置いた構成になっていることを示すものと見られる。表記は日本語教科書の方が安定しているが、これは、国語教科書が漢字の提示順に配慮しているためであろう。両教科書の語彙（見出し語の集合）の共通度[19]は、0.1650（自立語のみでは0.1102）であり、国語教科書間[4]より低い。また、日本語・国語両教科書の語彙構成は表2（次頁）の通りである。

表1	のべ語数(A)	異なり語数(B)	頻度1の語(C)	使用課数1の語	複数の表記を持つ語	B/A TT比	C/B 繰返し率
日本語	5059(2318)	749(698)	357(339)	432	6	6.75(3.32)	0.48(0.49)
国語	4013(2044)	875(833)	508(497)	642	61	4.59(2.45)	0.58(0.60)

タイプ・トークン比および繰り返し率から見て、日本語教科書は同じ語を反復して提示する

傾向が強い。これは、日本語教科書が句型練習に主眼を置いた構成になっていることを示すものと見られる。表記は日本語教科書の方が安定しているが、これは、国語教科書が漢字の提示順に配慮しているためであろう。両教科書の語彙（見出し語の集合）の共通度[19]は、0.1650（自立語のみでは0.1102）であり、国語教科書間[4]より低い。また、日本語・国語両教科書の語彙構成は表2（次頁）の通りである。

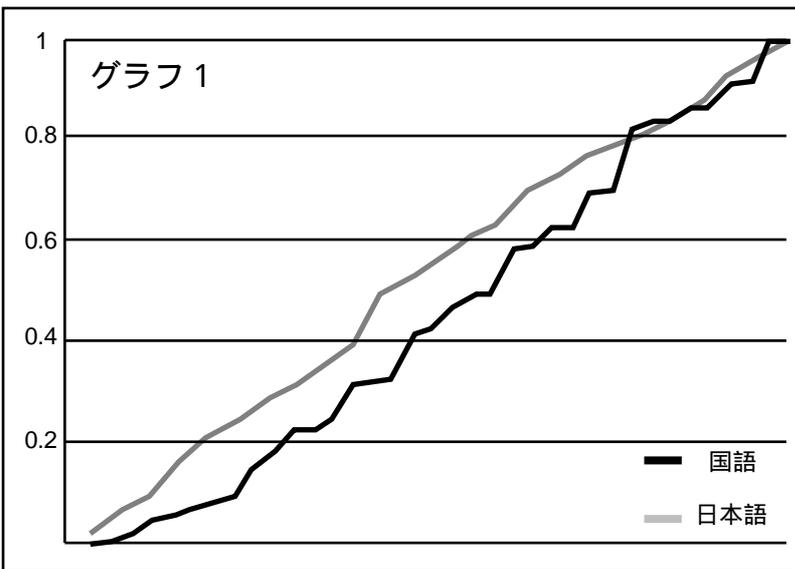
4 . 日本語・国語教科書における語の使用（各論）

本節では、いくつかの項目をとりあげ、日本語教科書と国語教科書の語の使用の相違点およびそれぞれの基本的特徴を考察する。分析には文献20などを参考にした。

4 . 1 . 名詞

グラフ1は、各課ごとの新出語の累積出現率を示したものである（右軸課数）。国語教科書では、課が進むに連れて新出語の提示が増える傾向にあるが、日本語教科書では前半と後半とに大きな差は見られない。これは、教育対象の違い（児童か成人か）を反映

	日本語 異なり語		国語 異なり語		日本語 のべ語		国語 のべ語	
	語数	比率(%)	語数	比率(%)	語数	比率(%)	語数	比率(%)
名詞	389	51.94	466	53.26	850	16.80	1033	25.74
固有名詞	64	8.54	5	0.57	196	3.87	44	1.10
動詞	91	12.15	190	21.71	543	10.73	596	14.85
い形容詞	31	4.14	32	3.66	99	1.96	57	1.42
な形容詞	21	2.80	20	2.29	61	1.21	44	1.10
副詞	39	5.21	74	8.46	127	2.51	149	3.71
指示詞	22	2.94	16	1.83	200	3.95	54	1.35
接続詞	5	0.67	11	1.26	23	0.45	26	0.65
感動詞	20	2.67	16	1.83	149	2.95	35	0.87
連語	18	2.40	4	0.46	80	1.58	9	0.22
助辞	22	2.94	23	2.63	1501	29.67	1006	25.07
文末詞	2	0.27	10	1.14	62	1.23	44	1.10
記号	25	3.34	8	0.91	1168	23.09	916	22.83
	749	100.00	875	100.00	5059	100.00	4013	100.00



したものであろう。

表3は、見出し語の共通性を示したものである（算用数字と漢数字とは区別せず、部分的一致は含まない）。括弧内の数値は、外来語および外来成分を含む混種語について見たものだが、両教科書に共通する外来語は、「バス」と「カード」のみである。文献21は、日本語教科書に現れる外来語と新聞に多出する外来語との共通性が低いことを指

摘し、効率的な外来語教育の必要性を説いているが、この結果も同様の問題を示唆するものであろう。

	日本語のみの語	共通の語	国語のみの語	合計
語数[語]	302(19)	95(2)	371(60)	768(81)
比率[%]	39.3(23.5)	12.4(2.5)	48.3(74.0)	100(100)

4 . 2 . 固有名詞

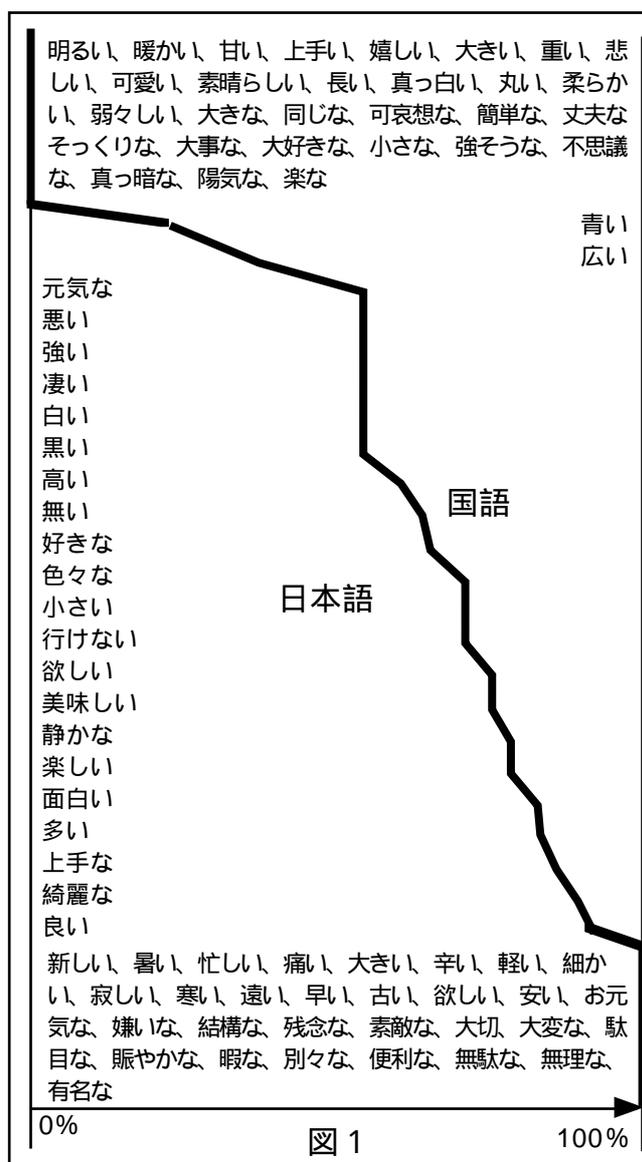
本研究では、日本語・国語教科書に加えて、韓国の教科書の固有名詞を調査した。小学校1年生の韓国国語教科書三分冊（読み・書き〔書き方〕・話し〔聴き取り〕）のうち、読みのテキストを対象にした。結果は表4（次頁）の通りである（人名には擬人化された

ものを含む)。調査結果から、日本語教科書に多様な固有名詞が使用されていることがわかる。また、日本・韓国いずれの国語教科書も読み物に登場する人名が繰り返し用いられ、人名以外の固有名詞が用いられないという特徴がある。これは国語教科書と日本語教科書の性格の違いを反映するものであろう。文型練習を中心に構成されている日本語教科書では、文に含まれる固有名詞を学習者に身近な語に置き換えることでより現実的な文として活用できる。そのために、人名・地名・組織名など多くの種類の固有名詞が用いられているのだと考えられる。一方、国語教科書では、発達段階にある児童に対して特定の地名や組織名を提示すると、かえって親近性が損なわれると見做されているのであろう。

表 4	日本語	国語	韓国語
のべ語数	196	44	146
異なり語数	64	5	32
うち人名	24	5	32
人名の比率	0.375	1	1

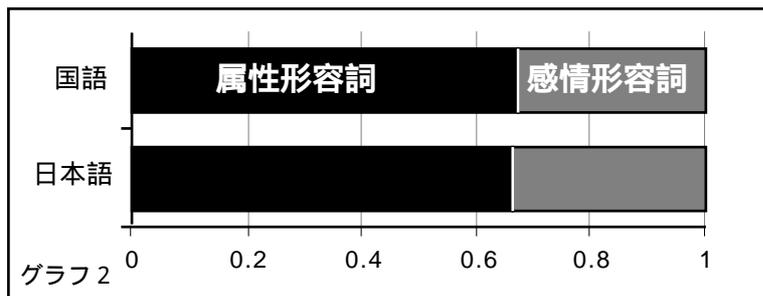
4.3. 形容詞

本研究では、日本語教育分野で一般に用いられる「い形容詞」「な形容詞」の名称を用いた(それぞれ学校文法の形容詞・形容動詞に相当)。い形容詞・な形容詞ともに、教科書間で異なり語数の違いはほとんどない(前掲表2参照)。しかし、その内容には違いが見られる(図1参照)。太い実線は横軸に対応し、両端に置かれた語に対する日本語教科書側から見た占有率を示している(総語数に違いがあるため使用率で計算した)。図の上に行くほど国語教科書に特有の形容詞、下に行くほど日本語教科書に特有の形容詞であるといえ、中央に配される語は共通性が高いものである。また、グラフ2(次頁)は、属性形容詞と感情形容詞[22]の割合を調査したものである(両方に属すると見られるものは、両方に0.5を算入した)。ここから、教科書間の内容の違いは、主観的表現か客観的な表現かというテキストの内容面による違いよりも、語彙選定にかかる問題である可能性が高いと考えられる。



4.4. 副詞

文献23は、戦前の国定教科書(国語読本)と戦後の小学校国語検定教科書の用語を比較した結果、擬音語・擬態語の使用が急増していることを指摘し、編集者の書き下ろしから



語が高い体系性を持つにも関わらず、日本語教育で体系的な指導が行われていないことも問題にしている。本研究でも、国語教科書には異なり語で28語（のべ65語）の擬音語・擬態語類が現れるのに対して、日本語教科書では一例も用いられていないことが確認される。また、副詞全体の使用傾向を見ると、日本語教科書は同じ語を繰り返し、且つ複数の課にわたって用いていることがわかる（表5参照）。これは、日常の様々な場面で用いる汎用性の高い語が選定されていることを示すものであろう。

児童文学作品の収載という編集方法の変化が一因であるとしている。文献24は、小学校国語教科書には擬音語・擬態語の類が多いものの、母語としての生得的感覚に頼った指導が中心で、体系性がないと指摘している。同時に、日本語の擬音語・擬態

	日本語	国語
のべ語数	127	149
異なり語数	39	74
平均使用課数(A)	2.51	1.30
A/総課数[%]	10.1	3.5

4.5. 指示詞

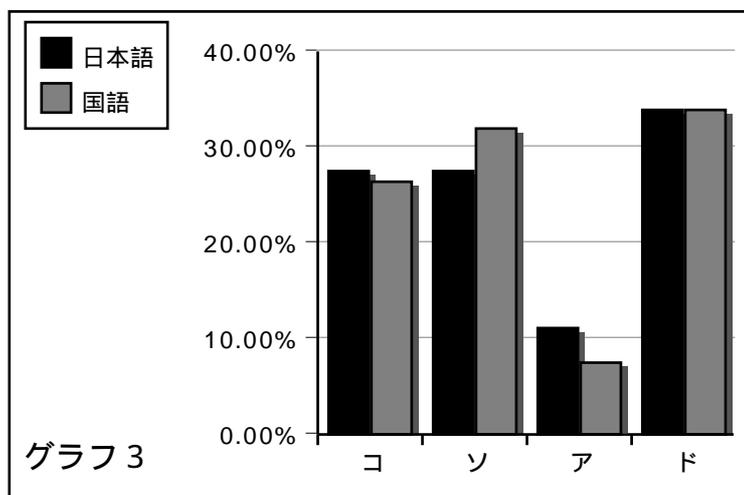
指示詞の使用を見ると、日本語教科書の方が使用数・種類ともに豊富であることがわかる（表6）。これは、会話文を基本とする日本語教科書で現場指示用法の指示詞が多くな

	日本語	国語
のべ語数(A)	20	54
A/総語数[%]	3.9	1.3
異なり語数(B)	22	16
B/総語数[%]	2.9	1.8

った結果と思われる。逆に、通常の文章に出現する指示詞は文脈指示用法が多くなると考えられる。国語教科書では、指示詞の用例が少ないうえ、5課が初出であり、用例の9割以上は10課以降に見られる。これは、文脈指示の理解が困難であると見做した配慮の結果ではないだろうか。グラフ3は、指示詞の具体的な使用傾向を見るために、両教科書の指示詞

をコソアドごとに分類したものである。指示詞は、文脈指示ではソが最も広範に見られ、話し手の直接経験はアで示されるとされるが[25]、国語教科書でアが少なくソが多いことは、文脈指示用法が中心であることを示唆している。逆に日本語教科書では国語教科書に比べてコやアが多くなっている。また、ド（不定称）の類は、日本語教科書に問答形式が多く、国語教科書で読み手への問い掛けが多いことから、両者に多用されている。

なお、本研究で扱わなかった対人指示（人称代名詞）に関しては、文献26を挙げておく。



4.6. 文末詞

本研究では文末詞を単位として独立させた。これは、語彙表に文末スタイルの情報を保存するためである。

文末表現に注目すると、両教科書とも文末詞を用いた文の割合は低いといえるが、国語教科書ではパリエーションが豊富である。また、日本語教科書は、問答形式の会話文を基本とするため、文末で疑問を示す助辞「か」が多用されている（表7参照）。

表7	日本語	国語
句点数(A)	818	369
文末詞総数(B)	62	44
異なり数	2	10
B/A[%]	7.6	11.9
「か」の総数(C)	246	20
C/A[%]	30.0	5.4

4.7. 助辞

助辞（助詞・助動詞のうち用言の連体・終止形、または体言類につくもの）については、「です」と「か」が日本語教科書で非常に多い点が目につく。これは、日本語教科書が「です・ます調」で書かれていること、および問答形式の会話文を基本としているためである（文末の「か」については前節でも触れた）。これら文末に用いられる助辞を除くと、両教科書で基本的な使用傾向に大きな違いは見られないようである（表8）。これは、ともに教科書として標準的な表現を選択した結果であろう。但、複数の助辞が連続して現れている箇所を観察すると、日本語教科書ではほとんどが（学校文法でいう）助動詞+助詞型の構造になっているのに対して、国語教科書では助詞+助詞型の構造も多く見られるという違いがある。これは、「には」・「にも」・「までも」などの微妙なニュアンスを表出する表現を初級段階の日本語教科書が避けているためと考えられる。

表8	日本語			国語		
	のべ語数	使用率[%]	使用順位	のべ語数	使用率[%]	使用順位
か	246	48.626	3	20	4.984	20
が	105	20.755	8.5	143	35.634	6
かな	1	0.198	571			
から	35	6.918	21.5	14	3.489	33
くらい	7	1.384	89.5	7	1.744	75
けど	2	0.395	318	3	0.748	191
こそ	1	0.198	571			
だ	9	1.779	74	52	12.958	10
だけ	2	0.395	318	2	0.498	297
で	49	9.686	12	33	8.223	14
です	331	65.428	2	27	6.728	16
でも				4	0.997	136
と	48	9.488	13	69	17.194	8
など	1	0.198	571			
に	105	20.755	8.5	83	20.683	7
の	108	21.348	7	189	47.097	3
ので				1	0.249	621.5
のに				2	0.498	297
は	217	42.894	5	145	36.133	5
ばかり				1	0.249	621.5
へ	42	8.302	15.5	12	2.990	38.5
まで	20	3.953	34	7	1.744	75
も	34	6.721	23.5	38	9.469	13
や	4	0.791	160.5	7	1.744	75
より	2	0.395	318	1	0.249	621.5
を	132	26.092	6	146	36.382	4

4.8. 記号

表記符号について見ると、使用される符号の種類が、国語で6なのに対し日本語教科書では11となっており、国語教科書で表記符号の使用が抑制的であることがわかる(表9)。また、句読点に関しては、日本語教科書で句点が読点より多くなっていることが特徴的である(表9)。これは、日本語教科書が、読点を必要としない短文あるいは単純な構造を持つ文を主に綴られ、長文や構造の複雑な文の少ないことを示していると解釈される。文型の反復練習を基本とする日本語教科書の基本的特徴の現れといえるだろう。

		日本語		国語		
		総数	使用率[%]	総数	使用率[%]	
1	。	818	161.69	、	443	110.39
2	、	223	44.07	。	369	91.95
3	*	34	6.72	「	48	11.96
4	?	23	4.55	」	48	11.96
5	14	2.77	(3	0.75
6	」	14	2.77)	3	0.75
7	「	14	2.77			
8)	5	0.99			
9	(5	0.99			
10	”	1	0.20			
11	“	1	0.20			

5. まとめ

本研究を通じて得られた結果および今後の課題を以下にまとめておく。

日本語教科書と国語教科書の使用語彙には違いがあり、日本語教科書と国語教科書の間の語彙の共通度は高くない。語の使用については、全体に、日本語教科書の方が国語教科書よりも同じ語を複数の課にわたって反復して使用する傾向が強い。この違いは、文型の反復練習を基本とする構成と文章の読解を基本とする構成との違いによるものと考えられる。また、日本語教科書と国語教科書には、品詞ごとの語の使用傾向にも違いが見られる。これは、教科書の基本的構成の違いとともに、会話文と読み物との違いおよび成人を対象とするか児童を対象とするかの違いによると考えられる。

本研究は、日本語教科書・国語教科書をそれぞれひとつのテキストに代表させたものである。しかし、小学校国語教科書(検定教科書)にはいくつかの種類があるが、それぞれの教科書によって使用語彙に差のあることが知られている[4]。日本語教科書に関する同種の研究はなされていないようだが、同様の問題は十分に予測される場所である。そのため、日本語教科書と国語教科書との十分な比較には、対象となる教科書の種類を増やさなければならない可能性がある。この点は、今後の課題としたい。

付記

本報告には電子化資料を収めたハイブリッド形式のCD-Rが付属する。

謝辞

荒谷幸絵、馬野奈緒子、大谷世津子、中原久美子、平岩ゆか、又吉里美(順不同)の各氏には、基礎データの作成に御助力いただいた。ここに感謝申し上げます。

文献

[1] 国立国語研究所(2000)『日本語基本語彙 文献解題と研究』国立国語研究所報告116,

明治書院.

- [2] 甲斐睦朗・石黒由香里編(1993)『国語科言語教育論(3)語句・語彙指導論』国語教育基本論文集成第21巻,明治図書.
- [3] 甲斐睦朗編(1982)『小学校国語教科書の学習語彙とその指導』光村図書.
- [4] 島村直己(1983)小学校低学年用国語教科書の用語,『研究報告集4』国立国語研究所報告74,77-207,秀英出版.
- [5] 甲斐睦朗他編(2001)『語彙指導の方法 語彙表編』光村図書.
- [6] 国立国語研究所(2001)『教育基本語彙の基本的研究 教育基本語彙表データベースの作成』国立国語研究所報告117,明治書院.
- [7] 平原真由美(1994) 児童のための日本語教科書と国語教科書の語彙の比較,平成五年度広島大学卒業論文.
- [8] 光本聡江・三宅節子・田中洋子(1995) 小学校国語教科書と日本語テキストにおける「て形」の分析 日本語補助教材作成資料として,岡山大学教育学部研究集録,第99号,29-46.
- [9] 付宜紅(1998) 小学校教科書の日中比較研究 構成原理を中心に,広島大学教育学部紀要第二部,第47号,29-35.
- [10] 根本今朝男・浜本純逸・森田信義(1980) 日・米・ソ連語いの比較研究,基礎学力を充実発展させるための国語教育に関する研究,科研費報告書.
- [11] 伊藤雅光(2002)『計量言語学入門』,大修館書店.
- [12] 国立国語研究所(1984)『高校教科書の語彙調査』国立国語研究所報告81,秀英出版.
- [13] 国立国語研究所(1987)『雑誌用語の変遷』国立国語研究所報告89,秀英出版.
- [14] 魚返善雄(1963)『言語と文体』紀伊国屋書店.
- [15] 藤原与一(1982)『方言文末詞<文末助詞>の研究(上)』,春陽堂.
- [16] 伊藤雅光(2001) ポップス系流行歌の語彙調査における外来語と外国語の判定基準,計量国語学,23(2),110-130.
- [17] 国立国語研究所(1982) 日本語教育基本語彙七種比較対照表,大蔵省印刷局.
- [18] 国立国語研究所(1989)『高校・中学校教科書の語彙調査 分析編』国立国語研究所報告99,秀英出版.
- [19] 宮島達夫・水谷静夫(1958) 質疑応答 語イの共通度について,計量国語学,7,40-42.
- [20] ケニィ,アンソニー(1996)『文章の計量』(吉岡健一訳),南雲堂.
- [21] 中山恵利子(2001) 日本語教科書の外来語と新聞の外来語,日本語教育,109号,90-99.
- [22] 国立国語研究所(1972)『形容詞の意味・用法の記述的研究』国立国語研究所報告44,秀英出版.
- [23] 甲斐睦朗(1983) 小学校国語教科書の副詞語彙の調査,『副用語の研究』(渡辺実編),432-452,明治書院.
- [24] 小野米一・王婉莹・スーザン,ジェビット・田原佳世・張海蓉(1982) 小学校国語教科書に見る擬音語・擬態語,鳴門教育大学研究紀要(人文・社会科学編),第14巻,9-18.
- [25] 日本国語大辞典第二版編集委員会編(2000)『日本国語大辞典第二版』6,小学館.
- [26] 大浜るい子・荒牧ちさ子・曾儀婷(2001) 日本語教科書に見られる自称詞・対称詞の使用について,教育学研究紀要第二部,第47巻,342-352,中国四国教育学会.